

平成15年3月31日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430) 1111

小正月の行事-塞の神-

I 塞^{さい}の神^{かみ}のよび名

正月送りの火祭りと道祖神（塞の神）の祭りとが結びついた、小正月の行事とされている「塞の神」は、近隣の多くの地域と同様に、狛江でも1月14日に行われていました。辻などの空き地に竹で組んだ円錐状の小屋を作り、各家々から集めた正月飾りや古い神札や注連縄、暮れの大掃除の煤払い竹等を、そのまわりに結わえつけて積み上げ、14日の朝、お焚き上げと称して、火をかけて焼く行事です。1月15日を中心とする小正月の時期には、その年の五穀豊穡や村内・家内安全を祈る行事が数多くあり、「塞の神」も、それら一連の小正月行事の一つでした。

この「塞の神」の行事を、狛江では、サイノカミ、セイノカミ、そして多くはセエノカミとよんできました。道祖神をドウロクジン（道陸神）ともいうところから、ドウロクジンという呼称もかれます。火の燃えさかるさまなどとかかわりのあるドンド焼き、ドンドン焼きというよび名は、もともと、狛江の地元では使われていなかったようです。

II セエノカミド・祭りの場

村境や辻などにまつられる道祖神は、塞の神（さいの神、さえの神）ともよばれ、さまざまな信仰をあつめてきた神です。道行く人を守る神であり、また、悪疫や悪霊が入ってくるのを阻み、追い払う神とされています。塞の神のサイは、境をさえぎるという意味をもっています。さらに、道祖神は子どもを守る神とされてきました。男女の縁をとりもつ神という面もみられます。

セエノカミは、多くの場合、旧村のなかの村組織であるコウジュウ（講中）とよばれる地区ごとに行われ、狛江の十数カ所にセエノカミドとよばれていた場所がありました。村境や辻の空き地とか、畑や田んぼの一角です。セエノカミドは、地区によっては、かならずしも一定しておらず、大きな火を焚くということから、その年々の周囲の状況や事情によって、場所を変えたりもしました。セエノカミドは、セエノカミの処という意味で、塞の神をまつる処、塞の神の行事をする場所を指しているようです。なお、狛江では、現在、辻などに、道祖神と刻まれた文字塔や道祖神の像塔はみられず、この神の御神体の多くは、おそらく丸石などの自然石だったと思われます。

III セエノカミの小屋作り

セエノカミでは、13、4歳の小学校高等科の子どもを親方にして、男の子たちが活躍しました。子どもたちは、何日前から、その講中の家々をまわって、正月飾りや前年の古い注連縄や神札、だるま、それに暮れの大掃除に使った煤払い竹などを集めます。「セエノカミの竹くんない、わらくんない」と声を張りあげながら、リヤカーをひいて歩きます。枝のついた竹、わら、縄は、小屋作りの材料です。セエノカミのお神酒銭^{みきせん}だといって、おひねりを渡す人、餅や薪をくれる家もありました。これらは、子どもたちの小屋でのおこもり用に使われます。

セエノカミの小屋は、寝泊りできるように作るので、青年たちに手伝ってもらいます。小屋作りのために伐ってもらった孟宗竹は、途中まで枝を払って、6本から8本ほどを束にして、上方をぎっしり縄で縛ってまっすぐに立てて、下の方を円錐状にひろげ、4本の綱で四方から引っばって固定します。1カ所、竹を組んで出入り口をつけ、小屋の骨組みができ上がると、まわりを篠竹や、わら、カヤなどで囲み、縄を巻いて、古い神札やだるま、正月飾り、書初めなどをとりつけます。小屋の大きさは、その地区により、時代によっても少しずつ違っていますが、むしろ4、5枚を敷けるくらい、子どもが14、5人入れるほどでした。小屋の中には、穴を掘って簡単な囲炉裏も設けます。

セエノカミの小屋の先端から上の方に長く高くつき立つ部分は、縄でぐるぐる巻きにして、この高く立つ柱を、オンベラボウとよんでいた。オンベラボウの先端には、だるまなど、なるべく目立つものをとりつけます。オンベラボウは、御幣をオンベロ、オンベラなどということから出たよび名

で、竹を空高く立てるのも、それを御幣というのも、神の依代^{よりしろ}という意味が込められているからと思われる。

IV おこもり

セエノカミの小屋は、セエノカミの祭場なのです。小屋そのものも、セエノカミとよんでいたようです。和泉や猪方、また、岩戸などでは、小屋の炉の中に、セエノカミの御神体だという丸い石などを入れておくところもありました。この石の御神体は、ドウロクジンとかセエノカミサマとかよばれています。ドウロクジンは、直径23、4cmの石臼状の丸い石とか、五輪塔の一部というものもありました。小屋の中に切った囲炉裏に、この石を入れてお神酒を上げます。赤くなるほど石を焼き、他の集落の子どもたちに盗られぬようにしたり、セエノカミの終わった後は、土中に埋めて隠したりします。よそから盗ってくると、その年はよいことがあるといったそうです。ドウロクジンの石の盗りっこは、和泉でよく聞かれました。

子どもたちは、13日の夜、あるいは12日の夜も、セエノカミの小屋で過ごします。囲炉裏で餅を焼き、雑煮や汁粉をつくったり、甘酒を飲んだりします。お神酒銭として集まったお金で、菓子を買えるのも、たのしみなものでした。

このような、セエノカミの小屋でのおこもりも、昭和の初めに世田谷の宇奈根で事故が起きてからは、中止されました。そして、岩戸を例にとってみると、小屋の作り方は、その中に炉を切らず、太い孟宗竹や真竹をセエノカミドに心柱^{しんばしら}にして立てるやり方になりました。この心柱の竹を中心に、何本もの煤竹を円錐状に組み立てます。まわりをわらで囲い、神札やお飾りなども縄で結わえついたり、囲った中に積み上げたりしました。

V セエノカミの火・神聖なはたらき

14日の朝早く、セエノカミの小屋の周りにお神酒と塩をまき、点火します。これは大人の仕事です。この火が燃えるときには、オンベラボウが燃え落ちる方角によって吉凶を占うこともありました。オンベラボウが最後まで立っているようにと、オンベラボウを支えるために三方とか四方とかに付けた縄を、一生懸命ひっぱって、いつまでも立っているようにしたそうです。燃えさかる火とともに、竹のはじける音が、勢いよくあたりに響きます。大きな音がでるように、太い心柱の竹に釘を打ち込むこともあったそうです。この日、登校した子どもたちは、その音の大小を競いあって話題にしました。

セエノカミで燃やした書初めが、高く舞い上がると習字の手が上がる、字がうまくなるなどといわれています。また、この火にあたったり、餅やマユダマを焼いて食べたりすると風邪をひかない。マユダマを焼いて、たがいに交換して食べると、無病息災、厄病にかからない、マムシよけになるなどともいいました。

燃えさしの竹を持ち帰り、クワッパレエ（鍬払い）を作って鍬の泥を落とすと鍬で足を切らない、流しの下や縁の下に入れておくとかヤスデがわからないなどともいわれます。また、この日、よく実がなるようにと、燃えさしの竹で柿の木をたたき習わしもありました。セエノカミの灰を畑にまくと害虫よけになるといって持ち帰る人もいました。

セエノカミは、厄病神を追いはらう行事だともいわれます。厄神様がセエノカミ様にあずけておいた帳面を焼いてしまうのだ、と伝える人もあります。帳面には、その年に厄神様が立ち寄ろうとしている家の名が、書いてあるからでした。

VI セエノカミの変遷

セエノカミは、大正の末ごろまでは、多くの集落の講中単位で行われていたようですが、場所の問題などもあって、近所の何軒かとか、あるいは各家で、正月飾りなどをお焚き上げすることも、ところによってみられました。そして、そのお焚き上げも、のちには、神社の境内で行われ、神社での正月行事の一つに組み込まれるようになっていきます。小正月の大きな行事であったセエノカミも、生活様式や生活習慣の変化、用地確保の問題などもあって、昭和27、8年ごろから30年ごろにかけて、すたれてしまいます。その後、さまざまな形で復活してきましたが、平成15年1月にも、ボーイスカウト・ガールスカウト連絡協議会による「どんど焼」が、和泉多摩川の河川敷で行われています。

（狛江市文化財専門委員 中島恵子）